



2010年(平成22年)
9月号(No. 784)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

「会員の推進力が活性化の原動力」

第26回全国支部懇談会、東京多摩支部で開催・・・	1
加賀正太郎とユングフラウ登山・・・	5
山ガールが新しい風——	
新感覚の登山時代の幕開けか・・・	6
竹節作太が採取したヒマラヤの石、 寄贈される・・・	8
東西南北・・・	9
九重山「遭難八十回忌慰霊祭」 活動報告・・・	10
海外委員会／資料映像委員会／ 集会委員会	
支部だより・・・	12
秋田支部／茨城支部	
ルーム日誌・・・	13
会員異動・・・	13
新入会員・・・	13
学生ネットワーク作り(1)	
東海学生山岳連盟の再発足・・・	14
図書紹介・・・	15
図書受入報告・・・	17
INFOMEATION	18

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木・・・10～20時
水・金・・・13～20時
第2、第4土曜日・・・閉室
第1、第3、第5土曜日・・・10～18時

「会員の推進力が活性化の原動力」 第26回全国支部懇談会、東京多摩支部で開催

高橋重之

26回目を迎えた支部懇談会が、今年は設立間もない東京多摩支部の主催で開催された。4つのプロジェクトのひとつ「支部活性化」をいかに実現していくかの命題のもと、支部活性化会員集会と支部報編集者会議がもたれ、活発な議論がなされた。多摩支部、会報編集委員会の高橋委員に報告してもらった。

第26回全国支部懇談会が9月5日から6日、東京多摩支部が主管して開かれた。会場となった東京・多摩市の京王プラザホテルには、全国から172人の会員が集まった。今回、初めて開催した「支部活性化会員集会」、「支部報編集者会議」で、支部活性化への行動指針、活動内容を語り合い、知恵

■支部活性化会員集会

初めての試み、提言相次ぐ

全国支部懇談会は、1982年

に開催した第1回集会から、ほぼ例外なく2日間の日程で開催され、初日は観光地を散策したり、講演会を催したりしていた。今回は、そうした趣向を変え「支部活性化会員集会」、「支部報編集者会議」を開催した。日本山岳会の再建に向けて立ち上げた4つのプロジェクトのひとつ、支部活性化プロジェクトが主催、支部を通じて全国から意見・提言を募り、会場で発表してもらった。

「支部活性化会員集会」は午後2時開幕。口火を広島支部・兼森志郎総務委員長に切ってもらった。全国で最も活発に活動している支部のひとつである。

「第1ステップは基盤づくりだった。県岳連などで活動している人を一本釣りして体制を整えた。第

2ステップは支部組織を再編成し支部運営を総務委員会に統合するとともに地元新聞社主催の文化センターに講師を派遣し地域活動を始めた」と、兼森さんは話した。

登山講座は7年目を迎え、いまでは、初級、中級など計10クラスに増え32人のスタッフが活躍している。初級講座を卒業すると支部友会員に、中級講座は正会員に推薦する仕組み。現在、112人の支部会員のうち32人は卒業生という。

今年、第3ステップがスタートし、小学生対象の自然学級が始まった。中高校生、大学生を対象とした登山教室も具体化した。活動拠点として、設立15周年を迎える12年には、支部ルームを取得し開設する計画だ。

登山講座、森づくり、分水嶺

8人のスピーカーが後に続いた。それぞれに支部活性化に向けて、独自の意見・提言を披露した。

江花俊和（福島会員）講演会、講習会等を東京だけでなく地方で行なう。会報『山』の支部ページを増やし、他支部の行事にも参加できるようにする。「県境踏査」を行なう。山小屋と連携し割引制度をつくれないうか。

諏訪吉春（千葉事務局長）現状認識は①山行参加メンバーが固定化、②支部運営への参加意識が薄い、③会員同士の横のつながりが薄いなど。そこで、会員のニーズを改めて把握、山行を多様化する。交流の場を増やすため沿線ごとに3〜4ブロックに分ける。支

部報に短信欄を設け原稿を募集し、連帯を図るなどを検討したい。

清水敏昌（東京多摩会員）都心への交通は発達しているが、中核拠点がなく、ひとつの会場に集まりにくい。そこでサテライト・サロンとして、町田、立川など6カ所に小さな拠点を設け周辺の会員が集まる会合を開いている。会員同士のつながりを強くし、情報の共有化を図る役割も大きい。今後とも活用していきたい。

早田道治（岐阜支部長）平均年齢が70歳を超え高齢化の顕著な支部となった。とにかく会員増を図る。「日本山岳会入会のおしり」をスポーツ店などに置いてもらい、支部PRにも努める。新入会員には、どこかの委員会に所属しても

全国支部懇談会開催年・開催地				
1	1982	6/19-20	諏訪湖畔、諏訪ハイツ	総務委
2	1983	5/21-22	日本平、鉄舟禅寺	総務委
3	1984	6/16-17	三河ハイツ	総務委
-	1985	-	-	-
4	1986	11/2-3	祖母山、高千穂荘	宮崎
5	1987	10/31-11/1	比良、本願寺會館	京都
6	1988	7/16-17	大雪・旭岳、旭川温泉	北海道
7	1989	10/28-29	伯耆大仙、皆生温泉	山陰
8	1990	10/13-14	蔵王、蔵王温泉	山形
9	1991	9/28-29	立山高原ホテル	富山
10	1992	10/31-11/1	英彦山、国民宿舎	福岡
11	1993	10/23-24	瑞牆山、増富温泉	山梨
12	1994	10/15-16	水ノ山、ハチ高原	関西
-	1995	-	-	-
13	1996	10/5-6	鳳来寺山、奥三河	東海
14	1997	9/20-21	黒姫山、芝峠温泉	越後
15	1998	9/19-20	男鹿三山、男鹿市門前	秋田
16	1999	10/16-17	養老山、大垣市	岐阜
17	2000	9/16-17	九重山、別府市	東九州
18	2001	9/20-21	三方岩山、片山津温泉	石川
19	2002	9/21-22	厳島、宮島駒ヶ林	広島
20	2003	9/13-14	十和田山、焼山温泉	青森
21	2004	10/2-3	阿蘇高岳、熊本市	熊本
-	2005	-	日本山岳会100周年	-
22	2006	10/7-9	永平寺、あわら温泉	福井
23	2007	10/6-7	源太ヶ岳、八幡平ハイツ	岩手
24	2008	10/11-12	福知山、北九州市	北九州
25	2009	10/25-26	磐梯山、リステル猪苗代	福島
26	2010	9/5-6	高尾山、多摩センター	東京多摩
27	2011	10/15-16	栗駒山（計画中）	宮城



活発な意見交換があった支部活性化会員集会

らい運営に参加していただく。山行回数を増やして月1回程度は実施したい。

重廣恒夫（関西支部長）高齢化・会員減が続いている。四国分水嶺踏査、近畿分水嶺踏査などを実施してきたが、来春から①登山教室の開講、②森づくり、③ホームページの充実を行ないたい。登山教室は月1回、3年かけて「地図とコンパスの使い方」、「沢登り」、「積雪期登山」などグレードアップしていく。

前川陽（石川事務局長）支部活性化に向けた基本理念は、崇高なアルピニズムの精神のもと①活動はすべて登山を中心に、②より

高くより困難の精神を尊重しながら登山スキル・体力の向上、学術・文化への関与、人材の育成、③全員参加に基づく登山活動の実践である。社会貢献の一環として「ふるさと登山道整備」の名のもと、登山古道の復活を選定した。

工藤文昭（熊本支部長）登山教室を実施し新会員を得た。今年から、登山研修を年3回実施し、自分たちで登山者を育てる。本部には入会金・会費の改善、国内情報に配慮した会報『山』の編集、『新日本山岳誌』の地区別発行、全国支部の定例山行に参加できる情報交換システムの確立などを望みたい。

岡本真理子（宮崎副支部長）この8年で支部会員は109人から84人に減少した。市民活動やイベントなどを通じ外部に積極的にアピールしているが、新たな試みとして、個々の支部会員を孤立させない情報提供、意識向上のため自由なグループ登山を始めた。

会員ひとりひとりの活性化を

会員集会には100人近くが参加した。意見交換のあと、石橋正美・支部活性化プロジェクト・チームリーダーが座長となつてフ



全員が腕を組んで、懇親会での合唱

リー・ディスカッションを行なった。

支部活性化とは、いったいなんだろう。活性化の進展度合いを数量化するのもひとつの考えだ。削がれる原因は、高齢化、参加意識・情報の欠如など。居眠り会員が多い。では、どうすればいいのか――。委員会活動を活発に行なうこと、森づくりも活性化につながっている。とにかく会員に参画してもらうことだ。活発な意見が相次いだ。

石橋座長は「会員の推進力が活性化の原動力だ。一人ひとりの活性化が全体の活性化につながっていく」と締めくくった。

■支部報編集者会議 さらなる充実へ、情報交換

「支部活性化会員集会」に先立って「支部報編集者会議」が開かれた。支部を網羅した規模で「編集者会議」と名のつくものが開かれたのは初めてである。支部の活性化で支部報の果たす役割、重要性がますます高まっているという認識が、遅まきながら編集者会議の開催になった。支部報をまだ発行したことの無い福島支部からも逸見征勝会員が参加して、前向きに取り組むと意欲を示した。

20人規模で部屋をセツトしたが、テーブル席はすぐいっぱいになり、壁際に十数席のいすを並べた。午前中の会議を終えた支部長の顔も数人見えた。尾上昇会長、神崎忠男副会長が、情報交換、取り組みへの認識・知識の共有が大切だと、会議の意義を強調した。

あらかじめ各支部にアンケートをお願いし、発行の頻度や部数、内容、ページ数、費用、課題、問題点などに答えていただいた。16支部から回答が寄せられた。会議では、回答資料を補足しながら、現状説明や問題点が提起された。発言のトップバッターは東京

多摩支部。2月に29番目の支部として発足し、5カ月後に第1号の『たま通信』を出した高橋重之会員が、支部の創設に果たした活字媒体・資料作り、連絡網、号外発行などの重要性を強調しながら経緯、経験を説明し、当面は「各支部報の内容なども参考に、支部の動きを伝達する情報紙に徹したい」と語った。

つづいて広島、関西、北九州、東海、越後、青森……と席次順に24支部の代表が発言した。共通の悩みは、発行費用、編集スタッフの負担増、後継者の育成問題、寄稿者の偏りと紙面のマンネリ化など。

会員読者からの反応、打ち返しが少なく、「読んでもらっているかどうか手応えがないのがさびしい」というばやきも聞かれた。

「本部やほかの支部との情報交換を強化し、企画を充実させたりイベントの参加者を増やすなどに役立てたい」「会報『山』に支部発の情報や原稿を載せるスペースをもっと増やしてほしい」などの提案や要望が出された。

予定の1時間があつという間に過ぎた。JACのホームページ

や支部独自のネット展開、支部相互の連携作業などについても話し合いたかった。議論もしたかった。支部報を通じて支部活性化を図る。来年も編集者会議を持ちたいという声が多く参加者から聞かれた。

■懇親会 勇壮な多摩太鼓、参加150人

和太鼓の響き、それが合図だった。懇親会は午後6時半スタート。和太鼓は地元多摩市を中心に活動している「多摩太鼓」のメンバーによるもので、猛暑を吹き飛ばす響きだ。

会場に並べられたテーブルには年次晩餐会と同じように、山名が掲示してあった。「雲取山」「高尾山」「陣馬山」などの多摩の山々。坂本正智・支部集會委員長の司会で始まった。

竹中彰・支部長が「多摩支部は本年2月に発足した。活性化の起爆剤になればうれしい。ご支援をお願いしたい」とあいさつ。続いて尾上会長が「発足まもない多摩支部に全国支部懇談会を開催してもらい感謝している。年次晩餐会と同じ、全国の会員が一堂に集ま

る。こうした催しは本部としても大いに注目している」などといさつ。乾杯は91歳、最長老である広島の本片山数雄会員の音頭で行なった。

約150人が参加した。久しぶりに再会した仲間との会話、最近登った山の話など、楽しい雰囲気盛り上がった。今年は、ことのほか暑い夏だっただけに、「暑かったね」というのが会話の始まりとなった。支部からいただいた日本酒、焼酎、ワインが花をそえた。

松田雄一、中村純二、宮下秀樹ら名誉会員を来賓としてお招きした。それぞれに全国支部懇談会の盛会を祝っていた。ネパール山岳協会副会長であるブミ・ライ・ラムさんがネパールから駆けつけてくれた。「ナマステー」とあいさつ、懇親会に参加できたことを感謝し「多摩はアジア山岳連盟の発祥の地。忘れていない」などと語った。もうひとり、サンタ・ラムさんは東京多摩支部の会員となった。余興として、青森支部会員が踊りを披露した。

年次晩餐会になぞらえて、支部の紹介が始まった。北海道から宮崎まで。ことしは、新たに東京多



植物などの説明を聞きながら登った高尾山山頂

摩支部、埼玉支部が加わった。紹介された支部会員が手を振って応え、歓迎の拍手に包まれた。次回の全国支部懇談会は宮城で開催される。高橋二義支部長は「来年10月に栗駒山を予定している。多くの参加を」と呼びかけた。

お開きの時間が迫ってきた。神崎副会長が壇上に上がった。参加者全員で山の歌を歌うという。歌詞カードが配られた。最初は、チヨモランマ賛歌―北壁隊の『みんなが頂上にいた』という歌。『北国の春』の替え歌で、日本山岳会が1980年、チヨモランマに北東稜、次いで北壁から登頂したときに歌ったものだという。今年は登

頂30周年にあたる。

やがて全員が腕を組み会場内が一つの輪になった。『今日の日はさようなら』を合唱し終わった。どの顔も満足そうだった。山の歌を歌う機会が少ないなか、忘れられない思い出になるだろう。

酒井省二実行委員長のお礼のあいさつがあり、午後9時に終了。二次会も用意されていた。約30人の会員が集まった。合唱が続き、ネパール民謡『レッサム・ピリリ』で踊り、さらに盛り上がった。

■記念山行

高尾山など3つに分かれ実施

翌日の記念山行は、フランスのミシエラン・ガイドブックで三つ星に設定され、人気が高い「高尾山」を中心に、「高尾の森づくり」、「多摩・武蔵野御陵散策」の3カ所で行なった。

高尾山には64人が参加した。午前9時前、京王高尾山口に集合。軽く体操をし、6つのグループに分かれて三々五々出発した。登りのルートは稲荷山コースで、木陰のなかの尾根道である。ほどよく直射日光が遮られ、涼風も吹く。真夏の登山としては予想よりも楽なの

だが、猛暑の続く今夏の登山。どつと吹き出る汗を拭きながらの歩きとなった。

おしゃべりをしながら、あるいは博識の会員による植物等の説明を聞きながら、11時ごろには全員頂上に集合することができた。帰路は沢筋を下る6号路をとった。午後1時過ぎには高尾山口に到着し、無事解散。解散後の生ビールが、健康であることの喜びを実感させる山行だった。

(共同執筆〓清水敏昌、成川隆顕、野崎裕美、写真〓澤登均)

カルチャー

加賀正太郎とユングフラウ登山

四手井靖彦

ユングフラウ(4158^{メートル})はアルプスを代表する山の一つで、日本人登山者も多いと思われる。

だが、日本人で最初にこの山に登ったのが関西の実業家、加賀正太郎(1888〜1954年)であることを知る人は少ないのではないか。寡聞にして筆者もその例にもれず、このほど京都・大山崎のアサヒビル大山崎山荘美術館で開かれた「名品展2010——加賀正太郎ユングフラウ登頂100周年によせて」を見て、初めてそのことを知った。

加賀は大阪船場に生まれた。幼少のころから蝶や植物の採集が好きで山に親しんだという。1910年、22歳の東京高商生だったとき、ユングフラウに挑んで頂上に足跡を記した。1908年、設立間もない日本山岳会(会員番号151)しているということは、すでに日本の登山界ではかなり知名人だったと推察される。年代的には、発起人の小島烏水らと

同年代で、中村清太郎とは、同期入会という。そのころ京都に、田中喜左衛門という人がいて、ガイドを伴って日本アルプスを跋涉している。登山はヨーロッパで起った一種の貴族趣味であったが、日本に導入されたころ、まず加賀や田中といった素封家に受け入れられたことは、登山史として興味ある事実である。

加賀はロンドンの日英博覧会を訪れる途上スイスへ立ち寄り、8月24日午前9時45分、ガイド2人を伴ってユングフラウの山頂に立った。『山岳』第六年(1911)に「欧州アルプス越へ」と題した投稿の中で、そのときの情景を次のように記している。

「空はあくまで晴れている。瑞西の名山悉く双眸の中に入る。南面すれば足下に起きるGrosser Aeschglesscherは蟹々と一大弧を描いて、Eggishornに至って其末を没している(長さ実に五十キロメートル瑞西に於いて最も大き

なグレエシヤである)。数里に亘って之を挟む両側の諸峰の中にFinsterhornはその左側の中程に一頭地を抜いて白頭をもたげている。遠く眼を放てばMatterhornはWeissornの蔭にかくれて僅かに其特徴のある頭をかしげている。其左にKl.MatterhornをにおいてMont Rosa、右にはGr.Combin獨り其右稍離れてMont Blancは遙に雲の上に頭を現している。」(現代用語、用字に改変)

加賀はこのとき泊まった山小屋「クラブハット」で、ウォルター・ウェストンの1801年の自筆の宿泊記録を発見している。ウェストンはいまだで文献でしか知りえ



1910年 ユングフラウに初登頂した加賀正太郎 © 加賀高之

ぬ歴史上の人物であるが、加賀らは同じ時代を共有していた。加賀は1954年、喉頭がんで没した。享年66。日本山岳会設立発起人の一人、高野鷹蔵は『山岳』第五十二年(1957)に次のような追悼文を書いた。

「加賀君のアルプス行が後年の辻村、近藤君のアルプス旅行の刺激となり、端緒となったことは当然であり、更に横君、松方君等々の後続部隊が出たので、加賀君のアルプス登りは日本山岳会同人のアルプス行の淵源ともいえる」

展覧会には加賀がユングフラウ登頂に使用したピッケル、ザック、ザイル、帽子、氷河ストック、登山靴、登山服、外套などいづれも大町山岳博物館蔵が展示された。

ちなみに、加賀がテムズ川を見下ろすウインザー城に見立てて設計して建てたイギリス・チューダー様式の別荘・大山崎山荘は、木津川、宇治川、桂川の三川合流地点を見下ろす天王山の中腹にある。加賀はここで好きな洋ランの栽培をしたという。現在は常設の美術館になっており、庭園とともに京都近郊の名所の一つになっている。

トレンド

山ガールが新しい風——新感覚の登山時代の幕開けか

米倉久邦

山に新しい風が吹いている。カラフルなファッションで山を楽しむ「山ガール」達の運んできた風である。多くの若者が集まると聞いて、8月末に涸沢で開かれた「涸沢フェスティバル」に出かけてみた。そこで見たのは、オールドアルピニストの常識が通用しない世界である。新鮮な感性を持つて若者達が山にやって来ている。確実に、「登山」という舞台に新潮流が生まれている。

若い女性が山に進出

「涸沢フェスティバル」は山と溪谷社が主催。登山初心者の方々に山の素晴らしさを体験してもらうことを目的にスタートしたイベントだ。日本で初の山岳フェスティバルに、どれくらいの人々が来てくれるのかという不安は1回目で解消したという。約300人が涸沢にやってきた。参加者は毎年増え、

3回目の今年は1000人以上と初回の3倍を超えた。

強烈な印象を受けたのは、圧倒的な若い女性達の存在感である。

参加した若者の6割が女性で占められた。しかも目を奪われたのは彼女たちのスタイルである。鮮やかな彩りの帽子とシャツを着こなして、半ズボンや膝までのスカートにタイトの組み合わせがとても可愛らしく、フレッシュだ。

山に新風を吹き込む彼女たちに与えられた名前は「山ガール」である。森に出かけるような格好で街を歩く若い女性をファッション誌が「森ガール」と呼んだ。そこからきたのだろう。山ガールの中心層は30代を中核に20代から40代。なによりも自分なりのファッションにこだわる。そして大胆にカラフル。イヤリングやネックレスをさりげなくしている人もいる。だが、山ガールが森ガールと違



若い人たちが大にぎわいの涸沢フェスティバル

うのは、その行動力だ。山スタイルで街に出るのではない。実際に山にやってくる。標高2300メートルの涸沢は日本最大の圈谷。見上げれば3000メートルの穂高連山の岩壁がそそり立つ。アルピニズムを象徴するところだ。上高地から約6時間をかけて登ってこなければ、到達できない。山ガール達はそれをもいわずザックを背負って山道を歩いてくる。

イベント仕掛け人のひとり、『山と溪谷』編集部の大畑貴美子さんは、発想のきっかけは野外音楽フェスだったという。屋外にテントを張って気ままに音楽や野外生活を楽しむ若者、特に女性が増えてきた。アウトドア、自然の中に女性の進出が目立つようになって

ていると気がついた。ジョギングが流行り、ヨガが人気を集める。体を動かす快感を覚えた女性は山を歩き出した。そんな女性をターゲットにしたイベントを考えたのが、涸沢フェスティバルだ。

だが、なぜ、いま女性が山に目を向けているのだろうか。「生き方を考える年ごろの女性、経済的にも精神的にも自立した女性が山に入ってきている。日常のストレスを離れ、山に挑戦して、もう一歩きついたら踏み出して達成感を得る。それに登山は1人でもできるし、グループでワイワイやるのもいい。山には、ただのスポーツではない文化的、哲学的な雰囲気もある」。そういうものが一体となつて、女性達を山に惹きつけているのではないかと、大畑さんは分析する。

自由な感覚で山を楽しむ

山ガールのもうひとつの特徴はブランド志向だ。最初に人気を集めたのが富士山。どうせ登るなら、日本一の山に挑んでみよう。若い女性達が行ってみたい、登ってみたいと思う人気スポットは、屋久島、熊野古道、槍ヶ岳。どれ



ファッション性を重視した「山ガール」の登頂

も有名で一流ブランドの山や地域である。中高年が好む鄙びた静かな山は人気がない。

山の楽しみ方もいままでとは違う。好天に恵まれれば、山頂を目指すのが普通だが、涸沢で出会った山ガールは自由に、思いのままに過ごしていた。テントでのんびりお茶をするグループがいる。ロッククライミングの体験教室に参加、「初めてなの。怖いけどおもしろい」と笑顔がはじける。彼女達にとっては、山頂を踏むだけが、登山ではない。

大阪から来た33歳の女性は「テント生活は初めてよ。ここで飲むビールは最高。なんで山に来るのかな。達成感かな。クライミングも始めたし、また、紅葉を見に来

ようと思ってる」。テントを背負って単独行だ。川崎市からという24歳は「オシャレから山に入ったの。こんな派手な格好は町では出来ないわ。山はハードルが高いと思ってたけど、一度来てみたら気持ちがよくてはまってしまった」と屈託がない。カラーコーディネイトの決まった2人連れは「山はほとんど初心者よ。いま、山が流行りというのでのつてみました」とあつけらかんとして言う。

見逃してはいけないのが「山ガール現象」を生み出した社会環境の変化である。登山用具店をのぞいてみれば、時代の変わりようは一目瞭然だ。赤、黄、青、緑、黒と色合いも豊富、デザインにも工夫を凝らした雨具やヤッケが女性客を待っている。まずはオシャレのセンスが大事だ。だが、それだけではない。雨に強く、汗をすぐに乾かし、暖かい。ファッション性と機能性を兼ね備えた衣料の開発が科学の力で可能になった。しかもコンパクトで超軽量だ。

なかでもびつくりするのは、ズラリと並んだ山用のスカートだ。「スカートで山に来るなんて」と眉をひそめるようでは、かなり遅

れていると思わなければならない。山にスカート姿が、いまや当たり前のことになりつつある。

アウトドアスタイルクリエイターの四角友里さんは「スカートで山に来ると、億劫だった着替えもトイレもとても楽。それに可愛いし歩きやすい」。山スカートが広まると、なんとなく山を敬遠していた女性も山歩きに抵抗感がなくなり、山に来るようになるという。登山者の裾野が広がる。「女の人が山に来るって、嬉しいじゃないですか」。山スカートの伝道師は、いい笑顔をみせてくれた。

涸沢で出会った山ガールはダウンのスカートがお似合い。「初めて着た時には、ちょっと勇気があったけど、歩いてもツツパリ感がないし、ベタつかないのがとてもいいわ」とすっかりお気に入りのようだった。

衣料品に限らず、いろいろな登山用具の進化も著しい。性能が格段にアップしているうえに、驚くほど軽くなっている。最新の調理用ガスコンロはなんと重さ150gである。1〜2人用の小さなテントなら一式で重さ1kgにもならないものが売られている。

意外にかさばって重いのが食料だった。だが、いまどきの乾燥食品はすごい。種類も豊富で、味もいい。お湯を入れて、おしゃべりしているうちに調理が済んでしまう優れたものばかりだ。

各メーカーは便利で使い勝手がよくしかも超軽量の登山用具や食品の開発にしのぎを削っている。テント泊の山行は荷物が重くて、というのは昔の話である。最新の装備でまとめれば、ザックの負担がグッと軽くなっている。涸沢までテントと食料を担いで登ってくるのも、それほど大変ではない。

若者を山に誘う世の中のムードも忘れるわけにはいかない。剣岳登頂を描いた映画『剣岳 点の記』の大ヒットは記憶に新しい。コミックでは、山岳レスキューをテーマにした『岳』が若者達に大人気で、すでに映画化が決まっている。社会の山への関心が高まっていると感じるのは、私1人ではあるまい。

涸沢には山ガールにつられて、山ボーイも増えていた。闊達に山を楽しむニュースタイルの登山の時代が、確実に幕を開けつつあると実感した。

トピックス

竹節作太が採取したヒマラヤの石、寄贈される

北垣俊明

日本登山隊のヒマラヤ遠征に深く関わられた竹節作太氏（1906～1988）が採取し、遺された石の標本が、このたび当館・奇石博物館に寄贈されました。日本登山史においても貴重なものであり、紹介させていただきます。

竹節氏の名前からまず思い浮かべるのは、日本のヒマラヤ登山の端緒を切り拓いたナンダコット遠征でしょうか。

竹節氏は1906（明治39）年、長野県下高井郡山ノ内町に生まれました。1928年には、日本人が初めて出場した冬季オリンピック（スイス・サンモリッツ大会）に、ノルディックスキー種目の選手として参加しています。

そして1936（昭和11）年、毎日新聞社の特派員として、立教大学ナンダコット登山隊（堀田弥一隊長）に参加。ガルワール・ヒマラヤのナンダコット（6867m）へ、初登頂の壮举を果たしました。その後、戦争の時代を経て、

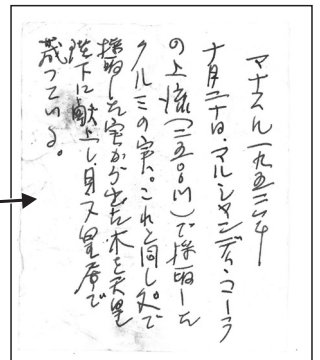
1952（昭和27）年には、マナスル踏査隊に参加。これを受け、翌53（昭和28）年に、第一次マナスル登山隊に、さらに54（昭和29）年には、第二次マナスル登山隊に参加。そして56（昭和31）年、横有恒隊長が率いる第三次マナスル登山隊にも参加、ついに念願のマナスル初登頂が達成されたのでした。

この日本人によるマナスル初登頂は、敗戦の傷が癒えない日本国民に勇気と自信を取り戻させるとても大きな出来事で、日本中が登頂のニュースに歓喜しました。

このたび寄贈いただいた竹節氏の石12点のなかには、アンモナイトの化石や氷河擦痕のある礫などもあります。石はそれぞれ大きさが1～15センチほどで、12点すべてに手書きのメモ紙が付かれています。そのメモには、採取した年月日、採取地点、標本名などが記されており、これらが1936（昭和11）年のナンダコット登山隊、52（昭和27）年のマナスル踏査隊の



竹節氏が採取したヒマラヤの石



ヒマラヤの石とクルミに添えられたメモ

時に、ヒマラヤ各地で採取されたものであることが分かります。

そのなかの一つに、ヒマラヤの山々をつくる石に混じり、「マナスル一九五二年十月二十日、マルシャンディ・コーラの上流（二五〇〇M）で採取したクルミの実。これと同じ処で採取した実から出た木を天皇陛下に献上し、目下皇居で茂っている」という手書きのメモが添えられた現生のクルミの

種も収められています。

当館は、過去にヒマラヤのジャヌーやエベレストなどの石も登山家の方々から寄贈いただいており、その一部を常設展示の中で紹介しています。これらの中には、植村直己氏や三浦雄一郎氏が採取されたものも含まれています。

今回ご寄贈いただいた竹節氏採取のナンダコットやマナスルの石も、日本登山隊のヒマラヤ遠征の歴史などとあわせて、来年には展示することを検討しております。竹節氏の遺された石にロマンを感じていただければ幸いです。

東 西 南 北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします)

九重山「遭難八十回忌慰霊祭」

加藤英彦

我われ東九州支部のホームグラウンドである九重山において、昭和5年8月11日、福岡県在住の若い岳人2人が、折からの暴風雨に見舞われ遭難死にいたった。

九重山で初めての遭難であったため、翌昭和6年には詳細なる報告書『廣崎秀雄・渡邊邦彦両君遭難一周忌に際して』(筑紫山岳会編・昭和6年10月25日刊)が発行された。同時に、遭難現場近くの1748mのピークには、遭難碑が関係者の手によつて建てられた。

遭難から80年が経った今年、「八十回忌慰霊祭」の挙行をという声があがり、遭難碑を訪れてみた。すると碑の前面にあたる石盤が長年の風雨にさらされて劣化、

倒壊にいたり、台の前面に放置されたままになっていた。その修復を行なうため機材を荷上げし、現地で3日間かけて元の姿に戻す作業を山の仲間と行なった。

そして、亡くなられた2人の家族に80回忌の慰霊祭を行なう旨の連絡をとるため、四方八方手を尽くして探した。すると、亡くなられた渡邊邦彦さんの弟さんが福岡県直方市にご健在であるとの情報が入り、連絡をとることができた。そして81歳の弟さんから、当時の貴重な資料や写真の提供を受け、慰霊祭には肉親としての思いを綴った弔辞もいただいた。

また、石碑の前面に彫られていた凡字と碑文(漢詩)の解釈をその道の専門家に依頼し、口語訳として当日の参加者に配布した。

慰霊祭は8月8日午前11時から、久住山御池の西側に建つ碑の前に行なう予定であったが、悪



有志の手により修復され元の姿に戻った慰霊碑

天候のため近くの池ノ小屋に急遽変更して執り行なった。参加者は60名ほどであった。

まず法華院白水寺第二十六代院主である弘蔵岳久さんの読経に始まり、焼香、そして碑文の解説と続いた。次に、「兄の事故がただマイナス面だけで終わることなく、遭難碑を通じて遭難の意味を語り継いでいけるのは皆さんのおかげです」という渡邊邦彦さんの弟、道夫さんからの弔辞が読みあげられた。

遭難報告書『廣崎秀雄・渡邊邦彦両君遭難一周忌に際して』に、2人の父親は連名で次のように思いを綴っている。

「山のいただきには今後幾度かの春秋が訪れて、山語らず、人語らず、草木語らずの日が参りませうとも、追悼碑のみは永遠に若くして逝ける二人の山の子の思い出を後々に傳へるのでありませう」(原文のママ)

犠牲者のご冥福を祈り、山の怖さを改めて参加者全員が認識する慰霊祭であった。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

海外委員会

植村直己の業績を顕彰

「ザ・植村直己・デー」

冒険家であり登山家の植村直己さんが、烈風吹きすさぶ厳冬のマッキンリーに単独で挑み、冬季初登頂を果たしたのち帰らぬ人となったのは、1984年のことだった。あれから四半世紀余りがたった今年7月24日、「山岳ニッポン 冒険の世紀『ザ・植村直己・デー』——冒険の系譜」(日本山岳会・日本山岳協会・毎日新聞社共催)が開催され、約5000人の登山を愛好する聴衆が集まった。

会の前半は、主催者代表として先輩の大塚博美元会長のあいさつの後、植村さんとゆかりのあった方々が登場。1970年、ともにエベレスト日本人初登頂をした松浦輝夫さん、日本縦断や極地の旅に同行取材した写真家の安藤幹久

さん、明治大学山岳部の同期生であつた廣江研さんが、それぞれの思い出を語った。

中盤に、田部井淳子さんの特別講演「私を山に駆り立てるもの」があり、その後は、若手登山家たちによる、ディスカッション「冒険の世紀」——受け継がれる元気の源」が行なわれた。パネラーとして天野和明さん、栗城史多さん、三浦豪太さんが登壇。コーディネーターはJAC会員であり山と溪谷社の編集者、神長幹雄さんがつとめた。また、山野井泰史さんのビデオメッセージもあった。

昨年、ピオレドール賞を受賞した天野さんは、植村さんの本を読んで憧れ明治大学山岳部に入ったこと、山岳部で培った力をもっていま自由に身軽に登れるようになったこと、仲間と登る喜びなどを語った。

山野井さんはビデオのなかで、

10歳のころ、植村さんは彼のヒーローであつたことや、植村さんの本を何冊も読んだこと、講演会に行つた思い出を語った。

現代は、植村さんが生きた時代よりもいっそう登山が多様化されている。それでも植村さんの軌跡を追うことにより、彼の冒険心や登山への思いが、いまに脈々と受け継がれていることを実感した会だった。

(柏 澄子)

資料映像委員会

「秩父宮親王山岳スキー」の写真が寄贈

「山の宮様」と親しまれた秩父宮



秩父宮殿下のスキー姿(大正13年5月 立山にて)

雍仁殿下(1902～1953年)のスキー姿の写真を、同宮家の関係者より8月上旬にご寄贈いただきました。

殿下が初めてスキーを履かれたのは大正初期、まだ小学生の頃、赤坂離宮あたりのスロープで楽しんだという。大正11年の暮れ、赤倉スキー場で滑つて以来、山スキーにすっかり魅せられた。大正13(1924)年5月には、横有恒、三田幸夫、大島亮吉らの案内で残雪の立山でスキーを楽しまれた。

今回、ご寄贈いただいた写真は、先の立山スキーで撮られたものである。資料映像委員会で大切に保管させていただく。(羽田栄治)

集委員会

南奥駆道踏査——地元山岳会の活動に驚きと感謝

昨年の熊野古道・奥駆道北半部の踏査に続き、5月15日から5泊6日の行程で南半部(南奥駆道)を踏破した。集委員の高橋聰氏を総責任者に、女性3名を含む総勢15名が参加(北海道支部3名、関東地区5名)した。

15日、近鉄「大和上市駅」に集合。

昨年の最終点である「前鬼」にタクシーで直行。翌16日から南奥駆道に向かった。前鬼からは樹林帯のなかの急登を繰り返して昨年の下山地点であるなつかしい「大古ノ辻」に至り、稜線伝いに「持経の宿」へ。無人小屋のため自炊で夕食をとり、小屋備え付けの毛布で寝た。3日目は転法輪岳を経て「行仙宿」へ。普段は無人小屋であるが、地元の山岳会「新宮山彦グループ」(玉岡憲明会長)の有志の方々が待っていて下さり、豪華な夕食とビールの差入れをいただいた。

30年前までクマザサと灌木におわれ通行不能であった南奥駆道45キロを再興しようと、1984年から「千日刈峰行」と銘打って作業を開始。約3年の時間を費して修験者、登山者の通行を可能にしたうえ、避難小屋の建設、水場の整備を行なっているグループと聞いた。驚きとともに、そのお陰で我われも踏査できることに感謝の念が湧いた。

行仙宿からは南奥駆道の最高峰で堂々たる山容の「笠捨山」を一気に越え、10時間の上り下りで「玉置神社」へ。神前の御前に宿泊するということで、アルコールな

しの夜を過ごした。

好天に恵まれたのもここまで。「熊野本宮」までの最終日は早朝から雨となり、標高が次第に低くなつてゆく上り下りを繰り返した。雨の雲間、熊野川を隔てて大鳥居が見えた時には、いよいよ熊野本宮へ下つて来たという感慨を持った。雨具を着けたまま、参道のみやげ店街を通り、熊野本宮に参拝。祝詞に詳しい石原達夫会員が全員の無事踏査のお礼を言上し、全行程の踏査を終えた。近くの湯の峯温泉の常宿に行き、熊野牛のしゃぶしゃぶで舌つづみを打ち、2年間にわたる奥駆道の踏査を祝った。

日程の作成、宿泊の手配など、集会委員の幹事の方々に心から感謝したい。今回も新たな知己を得た。これからも個人山行ではなかなか行けないような計画を期待したい。

(吉永英明)

仙丈ヶ岳、東駒ヶ岳に登る

8月8・9日の山行計画が会報5月号に掲載され、中央線車窓からも見応えがある未踏の山々だったので参加した。7日、ビジネスホテルに参加者11名が同宿した。

8日、4時半にタクシーで出発し、戸台口仙流荘バス停にて北沢峠行きの南アルプス林道バスに乗り換え、大平山荘前で下車。伊那の人は確かに「甲斐駒ヶ岳」とは言わず「東駒ヶ岳」と呼んでいた。

6時50分、簷沢を目指し樹林帯を登り始め、急登後の尾根で木の間越しに簷沢大滝を見る。簷沢沿いに登つていき、時折振り向くと、実に端正な東駒ヶ岳が大きい。マルバタケブキの群生と鹿防護柵を見たあと馬ノ背ヒュッテに着き、丹溪新道分岐を経由して、カールの底の千丈小屋に至る。昼食後、カールの右寄りのガラ場を登り、イワギキョウ、トウヤクリンドウ、ミ



高山植物の咲く仙丈ヶ岳(3033m)に集う参加者

ヤマミミナグサが岩稜に咲く仙丈ヶ岳(3033m)に12時前に到達。間ノ岳、北岳、鳳凰など南アの山々が大きく迫る。

下山する小千丈コースは、カールを見下ろしながらの稜線歩きで始まり、小千丈ヶ岳を踏み、二合目分岐に至る。ここより北沢駒仙小屋への近道に入り、16時15分に仙水小屋にたどり着いた。

9日、夜来の雨音を訝しく聞きながら寝ていたが、点灯なった3時に起床した。朝食時に小屋番から「今日は1日中雨」と聞かされた。8日に沖縄で発生した台風4号の影響により、局地的に雷を伴った非常に激しい雨が降る可能性があるらしい。東駒ヶ岳登山は中止となり、5時35分、仙水小屋を出発。6時20分、鹿のさ迷う北沢峠に着いた。北沢峠からはバスで戸台口に戻り解散となった。

2002年末の入会以来、支部は全く委員会や同好会などの活動とも縁が薄かった。本山行に参加し、成瀬、平井、清登氏らのリードにより安心感のある山行を経験でき、会員でよかったと思った。

(北嶋仲雄)

支部



だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとりポート
します。

秋田支部

北東北3支部、三県境の
四角岳に集う

前月号で青森支部から報告があったが、秋田支部からも報告しよう。

秋田・青森・岩手の県境に四角岳（1003[㍎]）があり、この山を取り巻く三県の支部で親睦登山を行おうと秋田支部が提案し、3年ほど前から話し合っていたが、この度、青森支部が主管となり、6月20日に第1回目を実施した。四角岳へは、秋田側は不老倉、青森側は花木ダム、岩手側は切通しからの3つのコースがあるが、秋田支部一行は、登り慣れた不老倉コースをとらず、今回全員初めての花木ダムからのコースを選んだ。

午前5時、3台の車で土崎支所前を出発。103号線を経て花木

ダム先の林道を辿って登山口に8時過ぎ到着。前日から泊り込んでいた高橋青森副支部長一行と合流する。8時40分、ひと足先に出発させていただき、林道跡を進んで山頂から東に延びる尾根に出て、太いブナ林の続く尾根を登り、ガス一面の四角岳山頂に10時に到着した。小休止後、西隣に並ぶ中岳（1024[㍎]）へ向かう。秋田と岩手県境の鞍部を経て、一等三角点と猿田彦を祀る中岳山頂に10時30分到着。記念撮影後、一瞬ガスが流れ、周囲の山々を眺めたものつかの間、雷が鳴り、雨も降りだしてきたので急いで四角岳に戻る。山頂では、青森支部の下山支部長一行が肉鍋とビールを担ぎ上げ、同時に岩手側からも内山支部長、菊池前支部長一行が到着。雷と雨降りの中、立食パーティにて和気藹々と親睦を深め合った。

四角岳と中岳の直下には、かつ



一等三角点と猿田彦を祀る中岳にて

て四角鉾山と不老倉鉾山があり、明治、大正期に最盛期を迎え、特に不老倉は地元大湯より人口も多く賑わっていたという。

私が、昭和42年に登山界に知られていないこの両山に初めて登った時は、不老倉では最後の採鉾をしており、四角岳山頂一帯は放牧地跡の面影が残されていた。

以後、両山を岳界に紹介してきたが、特に、10年ほど前に青森側から四角岳への新コースが切り開かれ、中岳とつながった。以来、一般登山者や一等三角点愛好者、タケノコ採りなどで踏み固められ、一般登山コースとして大いに楽しめるようになった。

近年、地元山岳会などによって整備され、ますます人気が高まり

嬉しい限りである。

最後に、青森支部に大変難儀をかけたことに感謝申し上げ、次回は秋田支部で計画する予定である。

（佐々木民秀）

茨城支部

白頭山登山

茨城支部は発足して3年目、支部会員数30人と全国最小規模の支部である。毎年、海外山行をしようということで、昨年の韓国最高峰ハンラ山と智異山に続き、今年是中国吉林省（旧満州）と北朝鮮との国境にある白頭山（中国名は長白山・朝鮮半島の最高峰）に出かけた。

白頭山は天池という火山湖の周りを16のピークが囲み、天池の中央を国境が通っている。最高峰の將軍峰（2744[㍎]）は北朝鮮側にある。我われのコースは、西側の登山口から中国側のピークを8時間かけて縦走し、北側の長白瀑布へ下山するというものだ。白頭山を水源として南西に鴨緑江が渤海へ、東には豆満江（図們江）が日本海へ流れ、いずれも中朝国境となっている。中国・朝鮮両側の

住民からは聖山とあがめられており、戦前には日本山岳会会員の今西錦司氏らが登っている。

登山期間は8月3～7日の5日間。千葉支部から2名の参加とゲストを加え、星埜支部長以下11名のメンバーで出発した。3日はソウルに宿泊。4日はソウルから空路、吉林省延辺朝鮮族自治州の州都・延吉市へ飛び、専用バスで2時間半、白頭山麓の町・二道白河に入り宿泊。

5日、登山の日。前夜からの雨で登山を諦めていたが、バスが宿を出発する頃には青空が広がり、皆で喜んだ。ところが登山口に到着し登り始めるとガスがかかり、



長白瀑布直下でのメンバー

頂上稜線に出た時には強風もでてきたため、縦走を断念した。国境石碑の前で記念撮影や、北朝鮮側へ数歩越境したりしてから下山。バスで約3時間かけて北側へ回り、長白瀑布の直下まで歩いた。天池の水が落差68mの滝となって流れ落ち、北へ松花江、さらに黒竜江に合流してオホーツク海へ流れる源流である。この日は長白温泉ホテルまで下って宿泊。

6日早朝、四駆車に分乗して北側の天文峰(2670m)直下まで行く。頂上からは、青い天池と將軍峰などの峰々を展望することができ、昨日縦走できなかった欲求不満が少し解消された。下山後、バスで5時間かけて北朝鮮との国境の町・図們まで行く。国境を流れる幅40m程の豆満江対岸には、北朝鮮の駅や集落などが見えた。

鉄道は戦前、日本が敷設したものだという。豆満江を遊覧船で下し、北朝鮮側の岸に生える灌木に手が届きそうな所まで接近する。一見、国境に緊張感はなかったが、実際には川を渡る脱北者を厳しく警戒しているということだ。

(西川元禧)

ルーム日誌 8月

2日	総務委員会
3日	財務委員会 支部活性化PT
4日	常務理事会 集会委員会 スキークラブ
9日	法人改革対応検討PT スキー クラブ 高尾の森づくりの会
10日	海外委員会 緑爽会 スケ ッチクラブ 00会
11日	山岳地理クラブ
12日	総務委員会 東京多摩支部
13日	会報編集委員会 支部活性化 PT
23日	総務委員会
24日	JAC YOUTH PT スキークラブ
25日	麗山会 つくも会
26日	三水会 01会 スキークラ ブ 山遊会
27日	自然保護委員会 海外委員会 8月来室者 279名
会員異動 (8月)	
物故	
荒井紀雄	(9890)10・3・4
草木陽一	(10820)10・8・11
小笠原寛	(14553)10・5・24
退会	
高堂真一	(10628)
終身会員	
松屋信之	(6343)

チャレンジ

学生ネットワーク作り(1)

東海学生山岳連盟の再発足

高橋玲司

平成21年11月17日の夕刻、東海支部ルームは、日ごろでは考えられない光景があった。狭いルームに若い学生が溢れかえっていたのだ。ある大学は、学生全員が1年生で、しかも全員19歳である。

7大学45名、一度はその火の消えた「東海学生山岳連盟」の再スタートである。司会の三重大学ワンダーフォーゲル部の主将、井上正隆君(東海学生山岳連盟副委員長)の初々しい司会と、委員長に就任した南山大学アルパインクラブのリーダー、山田利行君の元氣いっぱいのあいさつがあった。発足にあたり京都学生登山交流会や本部学生部のメンバーも駆けつけてくれた。周囲の関係者も満面の笑みで、明るい希望いっぱいの再結成式であった。

東海学生山岳連盟とは

1969年に東海学生山岳連

盟(以下、東海学連)は発足している。規約も名簿もそろってなく、東海地区の大学山岳部の情報交換の場として機能していた。

20年ほど近く前に一度、私は委員長を引き受けたことがある。そのとき一つの提言をした。日本山岳会東海支部への団体加盟である。私の所属する愛知学院大学山岳部がそうであったように、団体(東海学連)で加入すれば、加盟校の山岳部員全員が東海支部に顔を出すことができると思ったからである。部員1名の山岳部員も大学に山岳部がない学生も東海学連の名を借りて合宿が成り立つのではないかと考えた。しかし、私も社会人となり、話はうやむやになり夢として消えてしまった。やがて時は流れ、多くの大学山岳部が廃部になったり休部になったりして、いつしか東海学連も10年ほど前から自然消滅した。

東海学連の再発足



今年5月、新人歓迎会も若い会員で支部はルーム一杯になった

東海支部の青年部委員長となつてから、なんとか東海学連を復活させたいとの思いにかられ、さまざまな角度からアプローチを試みてみた。特に海外登山委員会と青年部で8年近くも開催しているヒマラヤ研究会の場やマスコミの活用、各種登山講習会への参加、さらにはネットやブログなどのさまざまな手段を講じてみた。

私の熱意に対して理解を示してくれた青年部の副委員長の南山大OB伊藤聡君、前述の山田、井上の学生両君と私の4人で核を作った。「レベルは違っていてもいい、同世代の人が集うことに価値がある」と各大学の山関係のサークル

を訪ね、説き続けた。

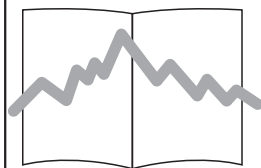
その結果、前述のごとく南山(アルパインクラブ)・三重(ワンゲル)・岐阜薬科(スキー山岳部)・岐阜(ワンゲル)・愛知教育(ワンゲル)・名古屋(ワンゲル)・愛知学院(山岳部)の7大学45名の若者が集結し、東海学連の再発足となった。活動も本格的な冬山から夏山の縦走、フリークライミングまでさまざまな分野に視野を置くことにした。

今年度から東海学連を日本山岳会に団体加盟させた。各大学が個々に加盟すると、部員数の少ない大学にはかなりの負担となるからである。一つの団体加盟で日本山岳会に大手を振って諸行事に参加できるという20年前からの私の思いが実現したのである。

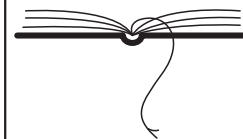
ちなみにその後も参加数が増え、現在では12大学116名の組織となった。会員数の拡大への対処をどうするか、会費の徴収方法など課題は多いが、ひとつずつクリアしていきたい。おかげで、集会日には東海支部のルームには学生諸君で溢れていることだけは事実である。

(つづく)

(東海支部青年部委員長)



図書紹介



齋藤繁・著

『病気に負けない健康登山—— ドクターが勧める賢い登山術』



2010年5月
山と溪谷社刊
新書判 214頁
定価 1000円

著者は2010年5月開催、

「第30回日本登山医学会」の会長を務め、ヒマラヤにも出かける現役医師である。

本書は現在の登山者の実態と問題点、実際に診療したケース、登山の準備等を健康医療の視点から解説しアドバイスをしている。

1章「健康によい山登りとは」では、登山を健康増進に生かすためのポイントを解説し、「自分の体をよく知ること」「無理はしないこと」「でも積極的に取り組む

こと」の3点に要約している。具体的に、自分は体のどこに弱点があるのか、どうすれば弱点を克服できるのかを考え、自分の体の弱点が出にくい歩き方、活動の仕方を試行錯誤することが大切だと説いている。さらにパーティ登山のメリット、ツアー登山の注意点、単独行など、自分にあった登山スタイルを選択することの重要性にも触れている。

2章「遭難例に学ぶ健康登山の鍵」では、最近の遭難統計を解説。道迷い、持病の悪化、下りで転倒の事例が多いという。特に心臓や呼吸器など循環器系統の発症が多く、自分自身で登山をするときの体調を知っておくことが重要であると述べている。起床時に何かスツキリしないなど、健康状態が普段と少しでも違うときは要注意だ。3章「山登りの1日 健康管理のポイント」では、体調維持につ

いて説いている。体調チェックの目安、朝起きてからのギアチェック、山に登るためのエネルギー、酸素がなければ登れない、なぜ休みたくなるのか、休息時間が必要か、いつ何を食えばよいのか、タバコと酒は要注意、山での快眠のために、体にやさしい下り方、下山後の体のメンテナンスなど詳細に解説している。

4章「備えておきたい山での不調」では、紫外線、熱中症対策、凍傷予防、夏でも起こる低体温症、高所障害の基礎知識・予防と対策について例をあげている。

5章「持病のある人の登山」では、生活習慣病、肥満対策、高血圧、心臓病、糖尿病、呼吸器疾患、腰・膝痛対策、サプリメント、体からのメッセージに耳を傾けようと具体的な疾病対策が記されており、読者にとって有難い忠告だ。コラム「知ってトクする病気の知識」は脳と脊髄、心臓、肺、消化管、腎臓、肝臓、皮膚、筋肉について、詳しく解説している。

本書は、各人が無理のない山登りのスタイルを学び、自身の体が発する信号を正しく理解することの大切さを訴えている。どこから

読んでもなるほどと納得し、思い当たることのある事例も多い。体調に自信のある人、ない人、高所に挑む登山家からハイキングを楽しむ人まで、幅広い人たちにぜひとも読んでいただきたい。

（南井英弘）

『山で見た夢——ある山岳雑誌編集者の記憶』

勝峰富雄・著



2010年5月
みすず書房刊
四六判 288頁
定価 2730円

『夢』というタイトルの黒澤明の映画がある。「こんな夢を見た」というフレーズではじまり、彼が見たいくつもの夢が語られる。天気雨の狐の嫁入り、吹雪のテントを襲う雪女、トンネルの奥から行進して現われる、戦争で逝った部下たち……。本書で思い出すのは、その黒澤の映画だ。

山と溪谷社で、編集長も含めて13年の編集者生活を経て、著者が初めて著わした本だが、さて本書がどんなジャンルの本かを紹介す

るのはなかなかむずかしい。

Ⅱ「山嶺を越えて」やⅢ「溪、そして秘境へ」の章では、分け入った山や沢が語られ、山行記として読むこともできるが、どんなルートをどう歩いたかの記述はほとんどない。Ⅰ「輪郭なき起伏」やⅤ「ショート・ソングス」、Ⅵ「頂のない山」はエッセイといえるかもしれないが、架空の「小説」も含まれているらしい。Ⅳ「人影の残像」は人物ルポに近い。そう、「山行記」「エッセイ」「人物ルポ」のどれでもあるが、どれかではけつしてない。ジャンルを固定されることを著者は拒んでいるかのようだ。

高校生の頃から「山」と関わりつづけてきた著者が、山の風や溪の水にさらし純化させた「山」に対する想念を、時間や空間、「虚と実」に縛られずに自由に解き放ったのが本書だ。その想念を著者は「夢」と表現し、「記憶」と名づけたのだ。本書で強く感じられるのは、著者の芸術一般に対する傾倒だろう。著者略歴の「興味を受けてきた人」の項に、辻まこと、坂口安吾の名前があるのは「なるほど」と理解できるが、森山大道（写真家）、

鈴木清順（映画監督）と続くと、

「えっ」と思われる。ましてや若冲、蕭泊の名前には「だれ？」という人の方が多いだろう。伊藤若冲と長谷川蕭泊、二人は江戸時代の「奇想の絵師」で、評価されたのも近年になってからだ。そういうえば、与謝蕪村が銀箔に描いた「山水図屏風」が「山と溪谷」誌に掲載されたことがあり意外に思ったが、著者の企画と知って納得した。

常に黒子であり続ける山岳雑誌の編集者から、写真や文章で自分を語る表現者として一步を踏みだした著者が、次に見る夢はどんな夢だろうか。（三好まき子）

『ユンシス』

横断山脈研究会・刊



2010年8月
横断山脈研究会刊
B5判 48頁

2008年11月、金子さんは白水社から浩瀚な研究書、500ページを超える『ヤングハズバンド伝』を公刊された。その評伝はまだ記憶に新しいところである。

そして昨年6月9日、東チベツトを舞台とする横断山脈研究会で『ヤングハズバンド伝』のできるまで」の講演をされた。場所は東京・日比谷、その話をまとめ、編集を長岡正利氏が担当された。横断山脈研究会の会報『ユンシス』に掲載されている。150点を超える図版を豊富に使ったその会報・報告は、私にとって本当に「ため」になる、おもしろい内容であった。

話の中心はもちろん、ヤングハズバンドではあるが、同時代の中央アジア、チベットの探検家が多数登場してくる。それを博学的な金子さんは文献・資料をもとに、本の書影、登場人物の写真を使って、次つぎにウラ話を説明、披露される。ヘーデン、スタイン、ペイリー、パウアーなどなど。ヒマラヤ登山ではブルース、マローリー、スマイス、シプトンなど、日本人では河口慧海、福島安正、日野強、能海寛、寺元婉雅、橘瑞超、大谷光瑞などが語られる。

以上の話のあとに、「追捕」として『ヤングハズバンド伝』に関わるいくつかのエピソードが加えられている。小説『キム』のキプ

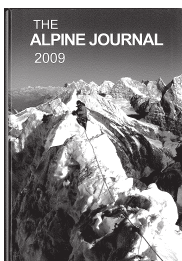
リングのこと、マカートニ、パウアー、ロバート・ショール、ロード・ロバーツ將軍とマーク・ベル大佐、シヨムバーク、ネイ・エリアス、オーウェン・ラティモアである。多分に情報収集や政治がらみの、生臭い話である。

金子ライブラリーにはまだ多数の文献や資料が蔵されていると思うと、この先、そこからどんな成果、労作が生まれてくるか、と期待するところ大なるものがある。

なお、会報『ユンシス』第012号の残部が30部ほどあり、送料込み1200円で頒価するとのこと。希望の方はご連絡ください。（申込先 〒156-0004 東京都世田谷区松原6-3-21 中村保 TEL & FAX 03-3332-5136 12）（薬師義美）

The Alpine Club・発行

『The Alpine Journal 2009』



2009年
A5変形 421頁
価格 英国内£26

英国山岳会の機関誌である。目次はアルピニズム、山旅、アルプ

ス、踏査、論評、科学、芸術、歴史、地域情報、エベレスト基金、書評、追悼などと例年になく細分化されている。

アルピニズムのトップ記事は、Mick Fowlerによるガルワル・ヒマラヤのVasuki Parbat(6792m)西面、何日も壁と苦闘しながらの初登攀ねらい。4番目はSimon Yatesのユーコンとアラスカ国境にあるMt. Vancouver(南峰西南リッジのアルパイン・スタイルによる初登攀など。

そして、ピオレドール2009受賞の「サムライ・ダイレクト(平出和也・谷口ケイ) カメット南東面」、「ブシドウ(佐藤裕介) カラシカ北面」や、同賞にノミネートされたほかの4つの登山「パチンコ・オン・デナリ(横山勝丘)」など日本の若者達の活躍ぶりは嬉しいニュースだ。

登攀倫理論として、商業登山のゴミ残置等環境問題を取り上げている。またピオレドール式典の閉会式で英国山岳会が第1回「Spirit of Mountaineering」賞をアンナプルナで遭難したスペイン隊救助に献身した外国隊の6人に授与した。

山旅の冒頭は、中村保氏の「Travels Beneath Blue Skies」で、東南チベットの鋭鋒の写真や地図、民族写真が目を引く。またアマ・ダブラム登頂後、エベレストBCからカトマンズまで302kmのランニング記録に挑んだ3人の英国人の記録もおもしろい。

アルプス「Who Cares About The Playground of Europe?」では、アルプスを含む8カ国の国際条約であるThe Alpine Conventionの「SuperAlp:3」(スロベニアのポベックからモンテローザのイタリヤ側まで)を通してアルプスの現状を観察している。そしてアルプスを旅し、アルプスに生き、アルプスに関心を持つ多くの人々からの意見を反映した「Alpine public opinion」を作り上げたいと結んでいる。

踏査「Sublime Sikkim」には、多くの魅力的な鋭鋒と未踏峰が残るシッキムの現地情報、入山規則、政府や山岳会の連絡先も記されていて重宝だ。なかでも「Cordillera Huaytapallana, Peru」は写真や地図で入山路まで見ることができ、40〜50の氷雪や岩の未踏峰が残されているという。

科学「Measuring Intracranial Pressure in The Himalaya」は、高山病のメカニズムや高所でのデーターの取り方、一覽表の見方など高所登山をする人には必見だ。

歴史「100 Years of The OUMC」では、オックスフォード大学山岳部を紹介している。1876年に創設され、1924年には女子山岳部も発足、現在に至っている。衰退する日本の大学山岳部の活性化に役立つだろう。

地域情報は、本誌が最も力を入れている世界の最新登山情報だ。アルプス、グリーンランド、冬のスコットランド、モロッコ、インド、ネパール、パキスタン、中国とチベット、ニュージーランド、コルディエラ・ブランカ、アルゼンチン・アンデスの初登頂、初登攀情報等が65ページにわたりびっしりと詰まっている。(南井英弘)

上高地山研の年末年始オープンについて

山研運営委員会

今年も、山研を臨時に、22年12月26日から23年1月4日まで、オープンします。詳細は10月号で案内します。

図書受入報告 (2010年8月)

著者	書名	ページ／サイズ	出版元	刊行年	寄贈／購入別
三鍋久雄	萬葉集 歌の山旅	554p／31cm	桂書房	2010	著者寄贈
高澤光雄(編著)	北海道の山に貢献された日本山岳会の先輩たち	55p／21cm	日本山岳会北海道支部	2010	発行者寄贈
近畿大学薬学部山岳部(編)	近畿大学薬学部山岳部50年史	90p／26cm	近畿大学薬学部山岳部	2009	発行者寄贈
全日本山岳写真協会(編)	山稜 2010——全日本山岳写真展作品集 (撮影地図付)	210p／22cm	全日本山岳写真協会	2010	清水正己氏寄贈

I N F O R M

インフォメーション



◆連続講演会 語り継ぐ日本山岳会の歴史 歴代会長「あの頃、そして未来へのメッセージ」を語る

資料映像委員会

連続講演会第3回は、19代会長・齋藤惇生氏を迎え、往時のお話などを映像・音声に収録します。

齋藤氏は、1997年5月より99年5月までの一期2年を会長として務められました。在任中、東海支部K2学術登山隊が西稜からK2へ、青年部が無酸素でカンチエンジンガ北面より登頂しました。また、秩父宮記念山岳賞を制定するなど、山岳文化の面でも功績を残しています。

日時 11月6日(土)15時より
場所 山岳会集会室・先着40名
問合 奈良千佐子 (TEL) 03-3402-6014 (FAX) 03-3402-1601

◆山岳遭難防止セミナー「山岳救助現場の実際」
(mt.chisako@mbe.nifty.com)

指導委員会

今年も長野県警山岳救助隊員を招いて、遭難救助の話を伺います。
日時 10月13日(水)18時30分～20時30分

場所 東京体育館第1会議室(定員100名)

対象 一般登山愛好家

参加費 無料

申込方法 (メールのみ)

(jac-seminar2@everest.jp)

*氏名・年齢・メールアドレス・電話番号・会員の方は会員番号をお知らせ下さい。定員になり次第締め切らせていただきます。

◆第20回山を語る

メスナー兄弟のナンガ・パールバート横断をめぐる

1970年、メスナー兄弟はナンガ・パールバートをルパール側から横断、ディアミール側の裾で弟のギンターが消息を絶った。この栄光と悲劇が交錯する行為をめ

ぐり、隊長ヘルリヒコッファーとメスナーの間で係争があり、論争は21世紀に入って再燃。この悲劇をメスナー自身が語る『裸の山ナンガ・パールバート』(山と溪谷社)の刊行を機に、訳者の平井吉夫氏が「騒動」の経過を語る。

日時 10月22日(金)18時30分より
場所 日本山岳会104号室
問合 三好まき子 (TEL) 090-8019-8601 (E) 344mm@mbe.nifty.com

◆「登山の医学」講演会

千葉支部(千葉市教育委員会後援)

安全で楽しい登山のために必要な医学知識について講演していただきます。申込不要、入場無料。

日時 10月24日(日)14時～15時30分
講師 増山茂氏(前了徳寺大学学長)

長)

演題 「楽しい登山に落とし穴は？」

場所 京葉銀行文化プラザ6階

「樗」(TEL) 04-3-2002-0800

定員 140名

問合 津田麗子 (TEL) 04-3-273-3722 (FAX) 04-3-275-1463 (E) reikoseiko@gmail.com

◆第28回図書交換会の出品図書募集について

図書交換会を本年度も開催します。本棚に眠っている山岳書をお寄せください。

出品図書は10月末日までに、氏名、会員番号を明記して「日本山岳会・図書委員会」宛にお送りください。来年3月に開催する図書交換会で希望者に頒布します。頒布価格は図書委員会に一任いただきますが、特に希望がある場合はご連絡ください。雑誌類は原則としてお断りします。

なお、図書交換会で頒布が成立した場合は、価格の8割を出品者にお返しします。

問合 三好まき子 (TEL) 090-8019-8601 (E) 344mm@mbe.nifty.com

◆講演会のお知らせ

緑爽会

「地平線会議」などの活動で知られる江本嘉伸会員をお招きして、

「日本人・挑戦の変貌——伊勢紀行からグレートジャーニーまで」のお話をうかがいます。

日時 10月12日(火)18時30分

場所 日本山岳会104号室

定員 40名

海外登山クロニクルの催し

海外委員会

日本人エベレスト初登頂から40周年、また日本山岳協会創立50周年を記念して、日本山岳会海外委員会と日本山岳協会国際部、毎日新聞社との共催で今年4月より「海外登山クロニクル」を開催しています。

1970年エベレスト登山隊の回想録とも言える「ザ・エベレスト・デー」、故植村直己さんの特集した「ザ・ウエムラ・デー」、先鋭的登山と冒険にその心を寄せる若者たちに焦点をあてた「ザ・エクスペディション・デー」と、9月まで3回のイベントを開催致しましたが、各回とも多くの参加者にご来場いただいています。

次回(12月)は、第4回として「ザ・ヒマラヤ・デー」を開催致します。1950年代の京都大学学士山岳会のヒマラヤ登山から続く、先達たちのヒマラヤに向けた熱い想いを語っていただきます。

また、最終回となる第5回は「ザ・ドキュメント・デー」として、過去から現在までのヒマラヤ登山を映像でご覧頂きます。

(「ザ・ドキュメント・デー」の内容等については、現在準備中です。)

参加問合せは、メールにて下記へお願いします。

海外委員会委員長・井本 ☒ Imoto@himalaya-kanko.co.jp

イベントタイトル	日時・会場	内容・プログラム
ザ・ヒマラヤ・デー The Himalaya Day	2010年12月5日(日) (13:30 - 17:00) 国立オリンピック記念 青少年総合センター	トークショー 1. 1950年代京大士山岳会 平井一正 2. 1980年 山学同志会 大宮求 3. 1995年 JAC マカール東稜 重廣恒夫 4. 2006年 ローツェ冬季南壁 田辺治 5. 女性登山家 出演者交渉中 6. 総論 池田常道 (資料代として会費500円)
ザ・ドキュメント・デー The Document Day	2011年1月16日(日) (9:00 - 19:00) (会場未定)	山岳ドキュメンタリー アーカイブ映画上映 1. ナンダコット登山隊の記録 2. マナスルに立つ 3. 白き氷河の果てに 他 (資料代として会費500円)

*上記は予定であり、内容は事前のお断りなく変更させていただく場合があります。

エベレスト登頂40周年記念トレッキング

日本人エベレスト登頂から40周年を記念して、ネパールヒマラヤのトレッキングと、カトマンズにて、ネパール山岳関係者との交流・親睦を深める記念パーティ、1970年当時の登山隊員である神崎忠男(当会副会長)の記念講演も開催します。

トレッキングコースのご紹介

- ① エベレスト展望と4000メートル峰登頂12日間 参加費:425,000円
- ② “ホテルエベレストビュー”と「ボカラ」を訪れる12日間(神崎忠男氏同行) 参加費:475,000円
- ③ ヒマラヤ山脈8000メートル峰9座展望とハイキング10日間 参加費:398,000円
- ④ エベレスト・カラパタール登頂20日間 参加費:482,000円
- ⑤ 最速カラパタール登頂15日 参加費:668,000円

参加申込み・問合せは、各ツアー取扱会社へ電話かファックスにて

旅行企画・実施: ツアー番号③・④: アルパイン・ツアーサービス(株) TEL 03-3503-1911 FAX 03-3508-2529

ツアー番号⑤: (株) ウェック・トレック TEL 03-3437-8848 FAX 03-3437-8849

ツアー番号①・②: ヒマラヤ観光開発(株) TEL 03-3574-9292 FAX 03-3574-6957

日本山岳会会報 山 784号

2010年(平成22年)9月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上昇
編集人 神長幹雄
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社

8月の理事会は、夏休みのため
休会でした。

申込 松本恒廣 (TEL & FAX 03-332612892)

◆「二人展」のご案内
平松久美夫と中村光吉両氏による、富士の絵とヒマラヤの写真展を開催いたします。平松氏はヒマラヤ山麓約10000キロを、数年かけて歩いてきました。

期間 10月1日(7日) (11時30分
19時、最終日は17時)

場所 元麻布ギャラリー (TEL 03-379615564、地下鉄麻布十番より徒歩5分)

問合せ 中村光吉 (TEL 090-1533916238)